

# 『カレッタライド』

菊野 啓

ぶはあつと、突然、鼻から息を吹き出し、年齢五十九歳だという巨大なアカウミガメは、その甲羅に触れようとしたタカシの顔を水で濡らした。同じ亀に手を伸ばしていたリョウウちゃんは、「噛みつくので危険！」と書かれた看板の横で、仰向けにひっくり返っている。水浸しの眼鏡を手で覆い、あえぐその姿は、奇しくも裏返された亀にそっくりだった。

なぜか今日は、美波町のウミガメ博物館に来ている。山田輪業社長のヤマダから招集がかかったのは、つい十日ほど前のことだ。

「バイク乗りを百人集めろ。いいか、百人だぞ」

セイブ・ジ・アースというNPO法人とやらの、海岸浄化作戦に参加するのだという。ウミガメが産卵に訪れる大浜海岸のゴミを拾い、カンキョウに貢献するのだと息巻いた。

首を傾げるタカシに、山田輪業唯一の押しかけ店員であるサトウが、鼻くそをほじくっていた小指を立てて見せた。聞けば、ヤマダの行きつけのスナック「ダイナム」のチエちゃんに誘われたのだという。しかも、バイク乗りを大勢集めて駆けつけます、と大見得を切ったらしい。なるほど納得。それにしても、百人は店のお客さんを総動員しても到底ムリ。

「たまにはバイク乗りの底力、見せてやろうぜ。だから、知り合い全員に声かける、いいな」

貧乏学生のタカシには、日頃の義理があった。夜中に峠で転倒したとき、軽トラで引き取りに来てくれた恩義を返すときなのだ。バイクに乗るあらゆる知り合いに電話したが、鼻で笑われることも多かった。もともと勝手なヤツらが多いのだから仕方ない。

案の定、当日の早朝、集合場所の山田輪業店先に集まったのは、わずか五台、ヤマダとサトウを合わせて総勢七名の有志たちだった。

「七人の侍みたいだね」

脂ぎった髪の毛を逆立てたヤマダが、寝惚け眼で言った。大あくびをしながら、めんどくさそうに愛車の73年式カワサキZ2に跨る。

「なんなの？このヤル気のなさは」

憤慨しながらタカシが聞くと、チエちゃんがドタキャンで来られなくなったらしい。はふっと、全身の力が抜けたが、昨日まで続いていたうっとうしい梅雨空は、幸いにもひと休みを告げて、初夏の眩

しい太陽に場所を譲っている。たまに県南の海を眺めに、バイクを走らせるのもいい。じゃないと、なまっただ体にカビが生えてしまいうだ。タカシは、暇にあかせて磨き上げた79年式CB750FZのセルを回し、ウミガメの里を目指して出発した。

国道を避けて山道を縫いながら、清掃活動が行われる大浜海岸に到着したのは、まだ開始時間の一時間も前だった。タカシたちは始めて訪れるウミガメ博物館を、見学することにした。

「うわあ、すごい」

プールの中を自由に泳ぐアカウミガメたちの数と大きさに、圧倒されたアカネが叫ぶ。毎年数十頭の亀が、命をかけて産卵にやってくる。途中で力尽き、海岸の置物になるヤツもいる。この砂浜で生まれ、大浜原に駆けだしていった子亀のいったい何百分の一が、再び生まれ故郷へ回帰できるというのだろう。

「ここの亀たちは、いずれ海に戻るんだろうか？」

リョウちゃんが暗い眼をして言った。近頃、彼はまったく元気がない。家業の仏壇屋がこの不況で売り上げを落とし、倒産寸前と聞いた。いつもはぴかぴかの彼の愛車、ドゥカティMH900eも、うつすらと埃を被ったままだった。

「戻れないな。傷ついたり、自力で泳げなかったりしたものだけが保護されて飼育されている。餌を貰いながらここで一生を終えるしかない。海に戻したら、すぐに死んじゃうだろう」

アンドレが突き放す口調で答える。口の端をへの字に曲げた険しい顔は、怒れる大魔神のようだ。ちりちりのアフロヘアは、ヘルメットを脱いだ頭をさらに巨大に見せる。百八十センチをゆうに超える上背で見下ろされると、本物のアンドレザジャイアントよりもっと恐い。そうだろうね、とリョウちゃんはうなだれた。

やがて、ゴミ拾いが始まった。主催者の挨拶の後、ビニールのゴミ袋と白い軍手が配られ、大勢集まった善良そうな老若男女が、いっせいに海岸に繰り出す。それに混じって、タカシたち七人のバイク乗りたちも、さらさらの砂浜に下り立った。家族連れの多い中、革ジャンにブーツ、バンダナといった格好は、完全に周囲から浮いている。

打ち上げられた無数のペットボトルや弁当容器、煙草の吸い殻などが、砂浜には所狭しと散乱していた。それらを手当たり次第に拾い上げ、袋に放り込んでいく。

くるぶしまで埋まる柔らかい砂を踏みしめ、百メートルも歩かないうちに、大粒の汗が全身から噴き出した。ぎらつく太陽が、重力に捕らわれた人間のひ弱さを嗤う。打ち寄せる平板な波は白く砕けて、せめてもの慰めにと見る者を癒した。深遠な碧となって沖まで続く大浜原は、水中を泳ぐアカウミガメの無限の自由を守っている。

ゴミ袋は、すぐに一杯になった。BMW純正の赤いジャケットのコンドウが、膨らんだ白いビニール袋を背負って歩く。その姿は、痩せこけた季節外れのサンタクロースを連想させた。

「やってらんねえぜ、まったくよお」

ゴミ袋半分も拾っていないヤマダが、煙草に火をつけようとして、アカネにきつく睨まれた。

「あんたが言い出したんだから、もっと真面目にやんなさいよお」アカネは美貌ではないが、そこそこにチャーミングな二十二歳の介護施設職員だ。愛車は先月納車されたばかりの赤いニンジャ250Rで、慣らしをやっと終えたばかりだとはりきっていた。白のタンクトップひとつになった胸元は、豊富な乳房が半分見えそうなほどに開放的で、深い谷間があまりにも扇情的だ。ちらちらとサトウが盗み見ている視線を、持ち前の無邪気さで弾き返す。

「だいたい、エコなんてよお、人間が多すぎるのが元凶よ。地球を浄化しようと思ったたら、六十五億もいる人口が、巨大隕石か、殺人ウイルスか、核戦争かで、せめて十分の一くらいに減ったらいのさ。後は地球が、勝手に浄化してくれる。地球を汚しているのなんて、人間だけだろうが」

ヤマダが、さらにねちねちと愚痴を言う。チエちゃんにドタキャンされたのが、よっぽど悔しいらしい。

「だから、反省して少しはお掃除でもしましよってことですよね」アカネの手前を意識して、Tシャツを汗で張り付かせたサトウが口を挟んだ。始めて彼女が店を訪れて以来、アプローチし続けているが、当然進展はない。

「げっ、何だ、こりゃ？犬の糞か」

ヤマダが掴んだ犬の糞は、すでに半分土化しかけていた。

「すまん、限界。俺ちよっと、休憩な」

せっかく拾った糞を投げ捨て、ヤマダは砂浜から去っていった。

「しょうがねえなあ。まあ、もうちよっと僕はがんばりましょ」サトウに続いて、タカシたちは再びゴミ拾いに集中した。

出尽くした汗が乾き、皮膚の表面を塩の薄い被膜がおおう。喉の渴きは、限界を通り越して、唾液の粘つきさえ奪っていく。しかし、タカシはなんだか気持ちよくなってきた。熱を帯びた体が、意志と離れて勝手に動く。おまけに、人海戦術でローラーをかけていくと、ゴミの山がどンドン片付いていくではないか。

目の細かい砂の中から、白いプラスチック片かと拾い上げたものが、貝殻だと気付いた。砂に落とそうとして、すぐそばに立っている五歳くらいの少女の視線に出会う。手に小さなビニール袋を握っていて、その中にはきらきらと輝く貝殻が収集されている。笑いながら、少女に薄い貝殻を渡す。はにかみながら、「ありがとう」と

微笑んだ。袋一杯にゴミを詰めた父親らしき男が、隣で小さく頭を下げた。

二時間もしないうちに、ウミガメをいつでも迎えられるような浜辺になった。博物館前のスペースには、トラック何台分ものゴミが山積みされた。その前で、ピースサインをするヤマダが、カメラに収まろうとしている。チエちゃんに、写真を自慢するつもりだ。

「やったね。バイク乗りも捨てたもんじゃやない。遠い海の底からやって来るウミガメさんにも、喜んでもらえenと思います。山田輪業では、この社会貢献活動を毎年恒例にします」

よく言うよ、と思いながら、タカシは配られたミネラルウォーターをラッパ飲みした。

「また、来年も必ず来るぞ、いいな」

親指を立てて、ヤマダが叫んだ。図太い神経と調子の良さには、いつも感心する。

「来年が、またあればいいけどね」

どよおおん、と暗いリョウちゃんが、太陽に炙られた真っ赤な顔で言う。いじけ方がみょうに深い。彼の赤いドゥカティM H 9 0 0 eは、駐車場でいつものように輝いているというのに。

「さあて、それではこの後、各自ミニツーリングで自然解散ね。お疲れさまでしたー」

落ち込むリョウちゃんにはかまわず、ヤマダが終了を告げると、誰が言い出すともなく、ヘルメットを被り、次々バイクを発進させる。

「南阿波サンライン」という県南のバイク乗りたちのメツカが、すぐそこにあるのだ。詣でて帰らないわけにはいかない。

アカネのニンジャ250Rの後ろを、店の在庫車であるトライアンフ・スクランブラーのサトウが追いかける。コンドウもBMW R1150RTを、やっとの事で引っぱり出した。パニアケースを背負った巨大なバイクは、鈍重な仔牛のようだが、いったん走り出すと、駿馬のごとき軽快な走りを見せる。コンドウは五十歳に近い開業歯科医だ。BMWのパニアケースの中には、歯の治療道具や、AED（自動体外式除細動器）などが入っている。時には頼れるメンバーなのだ。

アンドレのGSXR1000が、リアタイヤを軽く鳴らして、駐車場を出て行く。巨漢が跨ると、まるで250CCに見える。すぐさまタカシも、その背中に続いた。タカシの青いCB1Fは、山田輪業の倉庫の奥から発掘したヨシムラ管を取り付けたばかりで、エンジンをかけるのが楽しみだ。オイルも代えたばかりで回転も滑らかだった。

サンラインまでの峠道を軽快に飛ばしていく。汗がちぎれて後方に吹き飛ぶ。やっほー、と叫びたくなる。二車線の真新しいワイン

ディングが現れた。リズム良く右に左にこなしていく。

その気持ちよさを、突然に、ヤマダの火の玉Z2が打ち破る。がりがりとステップから火花を散らせて、コーナりの外側を追い越していった。先を行くアンドレにも、躊躇せずおおいかぶさろうとした。それをブロックして、GSXRが猛然とペースを上げる。とにかく誰であろうと、追い抜かれるのを毛嫌いするアンドレの強烈なアタックが始まった。命知らずのコーナリングは、後ろに近付くのをためらわせるほどだ。

「やれやれ、またいきなりバトルかよ」

ヘルメットの中で、げんなりしながらつぶやく。それでも乾いたヨシムラ管の咆哮に励まされ、タカシは遅れまいとアクセルを大きく開けるのだった。

アンドレこと田村幸四郎と出会ったのは、ちょうど一年ほど前、タカシが初期型の青いCB1Fを手に入れてすぐの頃だった。山田輪業に下取りで入ってきたそれは、今にも土に還りそうなほどヤレていた。値段を聞いて頭金だけ支払い、タカシは皿洗いのアルバイトを半年ほど続けた。毎月ヤマダに支払う金は微々たるものだったが、学生の彼にとっては、自分の稼いだ金で自分の欲しいものを手に入れるはじめての経験だった。それは、手応えのある満足感となつて、バイクへの愛着を増した。

機関の不具合に少しずつ手を入れながら、タカシは初めての愛車で四国の道を走り回った。そこは、一日ではとても貪り尽くせないほどの、垂涎のコーナりの宝庫であった。

梅雨の晴れ間の日曜のことだった。タカシは高知の四国カルストを目指して、早朝に家を出発した。信号のない山道を選んで、ひたすら走る。混雑した高知市街を抜け、カルスト台地へと急いだ。国道から上りのアクセス道に折れ、片道一車線のブラインドコーナリやアップダウンを持つ峠を上る。

しばらく進むと、先を行くGSXR1000に追いついた。同じ徳島ナンバーのそれは、背後に迫ったタカシに気付き、弾けたように加速した。つられて、タカシもダッシュする。一気に気持ちい戦闘モードに突入した。脈拍が上がり、口の中が乾きはじめる。

「けっこう、乗れてる」

ひとり、ほくそ笑んだ。ほとんど休みなしで長い道のりをこなしてきた。疲れているはずのタカシの四肢は、完全に力みから解かれ、バイクと一体化していた。サスペンションの動きが、自分の腰や太股にダイレクトに伝わってくる。機械と同化しているかのごとき、不思議な快感がスピードへの恐怖を麻痺させている。荒れたアスファルトや、路傍に散り敷く濡れ落ち葉を踏むタイヤのグリップが、

手に取るようにわかる。しかも、まだ余裕を残していた。

いっぽう、GSXRはアクセルこそ大胆に開けるものの、バランスの悪い走りで、今にも突っ込みそうに悪戦苦闘していた。巨大なリアタイヤを所々で暴れさせ、速く走ろうとする気持ちばかり焦って、バイクの進路が定まらない。完全にリズムを失い、背後に意識を向けすぎて、修正のきつかけさえ掴めそうになかった。

それを見て取ったタカシは、少し距離を置いて、これ以上プッシュするのをやめた。しかし、その配慮が伝わることはなかった。

両脇が山肌となる左に大きく回り込んだブラインドコーナーが現れた。クリッピングポイントを越えてから、きつい下りとなり、道を知らないよそ者にとっては、避けがたい地雷となった。GSXRはこらえきれずに、セクターラインを割った。そこへ運悪く、どんぴしゃりのタイミングで、老夫婦の乗った軽自動車を通りかかる。あっ、という声はつきり聞こえた。運転していた老爺の、喉の奥が見えた。

正面衝突する、その瞬間、バイクは車体を起こし、ためらわずに右に飛びすさった。軽自動車を避けると、側溝を飛び越え、幸いにもガードレールがなく土の斜面となった側壁を駆け上っては引き返し、再び勢いをつけて側溝の上を飛び、もとの道路に戻った。数秒の出来事だった。スローモーションの映画を見るようだった。バイクは魔法を使ったように、平然と目の前を走っていた。

「すごい」  
ヘルメットの中で、タカシは叫んだ。ブラボー、と手を叩きたかった。バイクの運転が、へたなのかうまいのか、わからないヤツだった。二台はカルスト台地の展望台に停まり、ヘルメットを脱いでお互いの顔を確かめた。アフロヘアの仁王さながら、真っ黒い顔の男がこちらを睨み据えている。

ついさっきのアクロバット走行を思い出し、腹の底がむずむずして笑いがこみ上げてきた。こらえきれずに、タカシは歯を見せて笑った。アンドレザジャイアントそっくりの大男だった。その男にも、一呼吸置いてから、笑いが伝染した。移ったかと思うと、爆発した。破顔し、腹を抱えて笑い合った。怪訝そうな顔の観光客が、傍らを避けて通る。まともに口がきけるようになるまで、大声で笑い続けた。長い間、二人の爆笑は続いた。

「とても、オレには真似できないよ」

タカシがようやく煙草を取り出し、ジッポで火をつけながら言った。「いつも、運がいい」

アンドレが、ぼそりと言う。タカシが差し出した煙草を一本抜き、ライターの炎に顔を寄せてきた。屈む格好になるほど、上背が高い。「このバイクは、馬力はあるけど、なかなかいいことをきかない」

「乱暴にアクセルを開けすぎじゃないの」

「三国志」の赤兎馬を駆る呂布のイメージを思い浮かべた。

展望台のベンチに座り、カルスト台地に露出した石灰岩を眺めながら、煙草をふかす。気まぐれな梅雨時の天気らしく、いつの間にか頭上は、分厚い暗雲で覆われはじめている。湿った雨雲が山の斜面を猛烈な勢いで駆け上ってくる。一雨来るかと思う間もなく、どしゃぶりの雨を撒き散らしはじめた。

「ヒヨウだ」

雨に混じってサイコロ大のヒヨウが、ばらばらと落ちてきた。ガソリンタンクを傷つけるけたたましい音がした。なすすべもなく、水煙に沈む愛車を置き去りにして、建物の軒先に逃げ込んだ。やがて、ドロドロと轟く雷鳴を従え、白刃のような閃光が近付いてきた。雲の中から、鋭い稲光がひらめいた。

山肌の緑から露出した白い岩を、滝のような雨が洗う。濃霧が視界を奪った。一瞬、世界が白く浮き立った。直後に、腹に響く衝撃が地面を揺るがせた。

がしゃん、という音を聞いた。アンドレのGSXRが、激しく燃えていた。腰が抜けて、動くことができなかつた。じゅうじゅうと音をたてている。幸いにも激しい雨が炎を消した。

「燃えた」

「うん、燃えた」

呆けた顔を見合わせた。頭上の雷は、ひと仕事終えて満足したのか、雨あしを連れてさっさと立ち去っていく。バイクに駆け寄った。カウルが焼け焦げ、ミラーが吹き飛んでいた。ヘッドライトは砕けて、周囲に飛び散っている。落雷の箇所を示していた。

「撃たれたな。やられた」

「雷が落ちるのを、こんなに近くで見たのははじめてだよ」

「タカシは心底驚いた」。

「なぜだか、オレは雷に縁がある」

子供の頃に落雷を受けたことがある、とアンドレは言い、その経験を独り言のように話し始めた。

アンドレの家は、こんもりとした森の中にあった。杉木立に囲まれ、ナラやシイの茂った森の中には、神社と背中あわせに茅葺きの住居が建っていた。その家で、彼は生まれ育った。

神社の境内には、樹齢百年を超える大きなクスノキがあった。その巨木の胴体には、小学生の彼が入り込めるほどの、大きなうろが穿たれていた。そこに背中からすっぽりと入り込んで、本を読んだり、うつろいゆく雲をぼうっと眺めていたりするのが好きだった。ある梅雨時の休日、彼はクスノキに抱かれたまま、うとうとと居

眠りをした。そして、夢を見た。今は会いたくても会えない母親の夢だった。彼の両親は離婚手続きのさなかにあつて、どちらが子供の親権を取るかで揉めていた。小学生の彼の希望も確かめられたが、答えを口にするにはできなかった。母親が恋しいとは、母が家を出た理由のせいで、言うことが憚られた。父の他に好きな男ができ、母は家族を捨てようとしていた。

頬に垂れる水滴の感触で、目を覚ました。いつの間にか晴れ間が、鈍色の重い雲で覆い尽くされ、大きな雨粒を落とし始めていた。一気に土砂降りになった。すぐに、雷が追いかけてきた。鋭い稲妻が遠くから、彼めがけて突き進んできた。

落雷が、クスノキを襲った。根の中にいた彼も、同時に打たれた。その瞬間、色、音、手ざわりから成り立つ世界を失った。ひよつとしたら死んでいたのかもしれない。長い時間が過ぎた。ふと意識を取り戻すと、夜の帳の中にいた。何事もなかったかのように立ち上がり、彼は家に帰った。そして、一緒に暮らしていた祖母と父親に言った。母親についていくことはしないと。森の中の生家に留まることを、七歳の彼は自ら選択したのだった。

相づちをうちながら、タカシはアンドレの長い話を聞いた。級友の打ち明け話のようだった。

「今日はバイクが身代わりになってくれた」

彼は神妙な顔で、焼け焦げたGSXRのカウルを撫でた。

「昔、雷に打たれたときは、稲妻が頭のとっぺんから入って、尻の穴から抜けていった。その後、不思議なものが見えるようになった」

「不思議なもの？」

「人の激しい感情の残像っていうのか、心の尻尾みたいなものが時々見えるようになったんだ」

「人の心が読めるっていうこと？」

「全部じゃない。激しく心が動いた後の余韻っていうか、意識の足跡だけが、絵のように心の中に浮かぶんだ。相手が何を考えたのか、部分的にわかる。リアルタイムの時もあるし、時間をおいてから浮かぶこともある」

小学生の彼が、母親についていくのを拒絶したのは、彼女の心の尻尾を見たからだだった。彼女は自分の息子よりも、若い男に狂っていた。

「信じるか？」

とアンドレは聞いた。曖昧にタカシは頷いて見せた。

「その後、直毛だった髪の毛が、アフリカ人みたいなチリチリヘアになったり、身長が異常に伸び始めたんだ。落雷を受けたクスノキは、枝がいくつ折れただけで、枯れることもなかった」



笑うと悪い気がしてやめた。他人の心の一部を読めるという話を信じない理由はなかった。

「おまえは、変なヤツだ。この話を、他人にするのははじめてのことだ。しかも、はじめて会ったやつに、なぜ話す気になったのかわからん」

変なヤツだ、ともう一度繰り返し、アンドレはバイクから壊れた部品を剥ぎ取り始めた。ハンドルを動くようにし、各部の損傷を調べる。キーをひねると、エンジンはいとも簡単に蘇った。

「なんとか走れそうだな」

「ああ、帰ろう」

気まぐれな梅雨空は雲の切れ目から、蒸し暑さを倍加させるいじわるな太陽を覗かせている。スピードを押さえ、二台は順序を入れ替えながら、帰路を辿った。山田輪業に着いたのは、遅い日没をとうに過ぎた頃だった。

「すげえな。雷に打たれたって？」

ヤマダが目丸くして言った。

「打たれたのはバイクです。カウルに直撃しました」

タカシの言葉に驚きながら、店先のGSXRを眺め回している。「ふうん、けっこう丈夫にできてるもんだ。今夜は置いて帰んなよ。

直しといてやるよ」

サイドスタンドを払って、バイクを店に入れようとする。

「あの、あんまり、金がないもんで」

店の入り口より頭のはみ出たアンドレが、額に皺を寄せて言った。わかったからよ、とヤマダは片手を上げた。

アンドレをCBFのリアシートに乗せて、森の中にある彼の生家まで送った。どうせヒマだったし、話に聞いた樹齢百年のクスノキを見てみたかった。アクセルをひねると、簡単にウイリーしそうになる。体重百キロを超える彼の巨体は、CBFのくたびれたサスペンションをきしませた。

夜の帳の中を、西に向かった。彼の家は、平家の落人伝説を持つ山間の村にあった。一車線の県道を、ひたすら樹木を縫って進んだ。峠を越え、ぼっかりと開けた平地に落ち込む。

こもりとした森が、闇の中に佇んでいた。話に聞いたクスノキが、大きく枝を張り、夜の暗さよりもっと濃い闇となって、空から覆い被さっている。その枝振りを傘として、茅葺き屋根の旧家が、巨大なキノコのように地面から生えている。神社の裏側に寄り添うように、その家はひっそりと呼吸していた。

家の前にバイクを止め、ヘルメットを脱いだ。家の中には、ぼんやりとオレンジ色の灯りが滲んでいる。

「上がって、飯でも食ってけよ」という言葉に誘われて、玄関をくぐった。古びた表札が目についた。「田村」と書かれている。

土間でブーツを脱ぎ畳に上がる。奥の部屋から、聞き覚えのあるメロディーが漏れてきた。ドボルザークの「家路」だった。女性が口ずさむ細い声を聞きながら、「たむら？」と何気なく思った。「たむら？田村先生！」ジグソーパズルが、突然ぴったりとはまった。遠い昔の記憶が、切なさや懐かしさをとまなび蘇った。タカシの胸の中で、さざ波がたち始めた。

まさかとためらいながら奥の部屋を覗いた。忘却の深い井戸の中に放り込んだままの亡霊がそこにいた。

「オレのばあちゃんだ」

アンドレは言い、薄暗い部屋の壁に、脱いだ革ジャンを掛けた。しわくちゃに丸まった老婆は、顔を上げないまま手元の縫い物に没頭している。口からこぼれる歌だけが、少女の声のように美しい。

「去年あたりから、認知症がひどくなってな。一日中この調子なんだが、ごはんだけはちゃんとつくってくれるんだ」

帰ったよ、と声をかけたアンドレを一瞥することもなく、老婆は自分自身の世界に閉じこもったままだ。胸をざわつかせながら、タカシはその顔を見た。

「田村先生」

やはり、田村賀代先生だった。凜とした音楽教師の佇まいは、すっかり失われてしまっていた。

「芹沢です。小学校の時、金管バンドでお世話になった芹沢タカシです」

その頃もやっぱり、田村先生は老人だった。定年退職直前の田村先生は、金管バンド部の顧問でその年の暮れの大会を目指して、部員たちに猛練習を課したのだ。タカシの夏休みは、日がな一日トランペットを握って明け暮れた。マウスピースを吹く唇から血が滲み、脳から血が失せてその場に倒れた。田村先生は、倒れた生徒に容赦なくバケツの水をかけた。文化系の金管バンドでは異常な指導だった。長年顧問をしてきた田村先生は、急に気が狂ったとしか思えなかった。退職前にひと花咲かせるのが動機にしては、いささか常軌を逸していた。

「知り合いか？まあ、昔話でもしていてくれ」

アンドレは驚いた顔で言い、食事の支度をするために、かまどのあ

る土間に下りていった。

田村先生に話しかけようとしたが、言葉が出てこなかった。スパルタ特訓のさなか貧血で倒れたとき、田村先生のビンタを受けながら、小学生のタカシは怒りを沸騰させた。何か復讐してやろうと思

い、田村先生が入れ込む年末の演奏会で、失態を演じさせるべく幼

稚な仕掛けを画策した。しかし演奏会は無事終わり、結果は準優勝だった。その仕掛けは不発に終わったかに見えた。

田村先生は鬼指揮者からもとの優しい老人に戻って、練習に耐えた部員たちを迎え、讃えた。その目には、温かい涙が溢れていた。タカシは自分の仕組んだいたずらが、失敗に終わったことにほっとしながら、田村先生と握手をした。そのとき、先生のスカートに大きな血の染みがあるのに気が付いた。タカシは愕然とし、猛烈に後悔した。ちくりですむイタズラのつもりが、大量の血が流れるほどのケガをさせていたのだ。痛くないはずはなかった。最後まで、それを表に出さなかった。痛みをこらえて、指揮を続け、準優勝を勝ち取った。部員たちにとっても、猛烈に何か打ち込み、そして飲み込んで満ちた結果を手にするという人生はじめての経験は、体の奥底に宝物として刻まれた。それなのに、タカシはお礼どころか、つまらないいたずらで先生の体を傷つけてしまった。

謝りたかったが、その機会はついに訪れなかった。翌年、田村先生は定年退職をして、二度と会うことはなかったからだ。その後悔は苦い記憶として、頭の片隅に沈殿し続けてきたのだった。

「芹沢なんて生徒は知らん。そんなヤツ、私の生徒ではない」

田村先生はぎらつく目を向けて、はっきりと言った。怨嗟の塊が、口から飛び出して、タカシを打ちのめした。先生は心底怒っている、と思った。いつの間にか、小学生の金管バンド部員に戻ってしまった。ていた。

「メシだ」

アンドレがその錯覚を中断させた。土間の食卓に座って、三人でメシを食った。そば米汁にどんぶり飯、おかずはスタチと醤油をかけた縮緬じゃこだった。

「このそば米汁はばあちゃんが毎日つくってくれます。毎日だ。これしかつくらないが、オレはうれしい」

湯気のたつそれをすすり込んでみて驚いた。

「うまい。信じられないほどうまいよ」

腹が減っていた。朝から何も食っていなかった。田村先生のおつくつた醤油風味の汁は、絶妙のダシ加減でゆるやかに胃に染み込んでいく。

「だろう。不思議な味だ。オレはここ数年、毎日これしか食っていない」

「生徒に殺される」

田村先生が箸を動かしながら、ぼそりと言った。

「会話ができる状態じゃなくなってから、一年以上になるが、認知症の症状はここ数日で、さらに進んでいるみたいだ」

アンドレが不安そうに老婆の姿を見つめた。いつまでも、一心不乱

にメシを掻き込んでいる。喉に押し込んでいるごはんの量は普通じゃなかった。その姿を眺めていると、BMWに乗る歯科医のコンドウの言葉を思い出した。

「人間は一本の消化管に過ぎない。このよると長い管を維持するためだけのために、脳や四肢、五臓六腑、他のすべての器官が付属していると思えばいい。産み出すものは、クソという名の黄金だ」とコンドウはまじめくさった顔で言った。

「ミミズのお化けみたいなもんですか？」

サトウが納得した顔で頷いた。彼はコンドウの歯科医院に、虫歯の治療のために通っている。田村先生の底なしの食欲は、まさに不死の消化管を彷彿させた。

「さあ、祖母ちゃん、ごはんは終わりだよ。もう寝よう」

アンドレが諭すように言い、老婆から箸と茶碗を取り上げて、奥の寝間にいざなっていく。おとなしくそれに従う老婆には、かつて金管バンド部員をしごき上げたスパルタ教師の面影は、どこにも残っていないかった。

田村先生を蒲団に入れて戻ってきたアンドレと酒を飲んだ。泊まっていたいけ、というのでそうすることにした。一升瓶から冷や酒を注ぎ、コップを傾けた。田村先生と金管バンド部のことを話した。

「ばあちゃんが定年退職した年の前年、オレのオヤジつまり、ばあちゃんの息子が死んだ。吉野川の下流に溺死体として浮いていた」酔っているのか、しらふなのか、まるでわからない顔で言う。酒を注ぎ足してやると、丸く膨らんだアフロヘアをぼりぼり掻きながら、話を続けた。奥の部屋から布団の中の田村先生が、再び家路のメモデーを口ずさみ始めた。それは、物語の背景を彩る静かなレクイエムだった。

アンドレの父、田村洋二は離婚を成立させる過程で、ひどく疲弊した。他に男をつくって出て行く母が投げかけた最後の言葉は、なによりも父を深く傷つけた。「マザコン！」と彼女はアンドレの前で、三十代半ばの父を罵ったのだった。それは子供ごろにも、悪意に満ちたナイフの切っ先のようなひと言だった。

母が去り、藁葺きの旧家での三人の暮らしが始まった。ゆっくりとたゆとう時の流れを取り戻したかに見えた。しかし父の精神は傷が深部で化膿していくように、しだいに蝕まれていった。アンドレは、落雷によって授かった不思議な能力で、ときおり父の心が激しく動揺するのを感じていたが、なすすべもなく、傍観しているしかなかった。

母がいなくなっから一年二年とたつうち、品行方正の鏡のようだった父の行動がおかしくなりはじめた。父は市内の中学校教師を

しており、この山間の村から、毎朝一時間もかけて登校していた。学校に行かずに、パチンコをして日中を過ごした。何がきっかけか誰にもわからなかったが、自動二輪の免許を取って、大型バイクに乗り始めた。

村中で噂になるほど、奇行あるいは錯乱といえるものだった。祖母は突然始まったひとり息子の思いがけない変化に戸惑い、心配のあまりあわてふためいた。ときにそれは怒りの感情として噴出し、しばしば火花を散らす正面衝突として屋内を揺るがせた。強固な母子の関係に何者かがひびを入れようとしていた。

家族の繋がりが朽ちて腐っていく長い年月の中で、アンドレは成長していった。母が家を去ってから十年が過ぎようとしていた。

父の精神は壊れる寸前だった。数年前から鬱病の診断を受け、休職を余儀なくされていた。一日中、納屋でバイクをいじって暮らしている。アンドレが二十歳を目前にした頃、父は言った。

「このバイクの修理が完成したら、教師をきっぱりと辞めて、旅に出るよ」

祖母は目を丸くしたが、アンドレは「そうしたいなら、応援するから」と、かえって父を励ました。高校を出てから、その異様な風貌によって定職に就くこともかなわず、ときどき日雇いの肉体労働に出るしか能のないアンドレの意見に、謹厳な祖母が同調するはずもなかった。解決をさらに遠のかせるだけの、不毛ないざこざが続いた。鬱病という厄介な病に関する深い理解を、誰ひとり持ち合わせていなかった。祖母も定年退職を間近に控えていた。

結局、父のバイクが完成することはなかった。大雨警報の出た梅雨時のある晩、酒を飲んで川の様子を見に行った父は、翌朝下流の定置網に溺死体としてひっかかっていた。鬱病を苦にしての自殺の可能性ありと報じられた。アンドレは肝心なときに、自分の能力で父を救えなかったことを、心底残念に思った。

父が死に、祖母と二人きりの生活になった。それをさらに十年以上続けてきた。祖母は定年退職をした後、ほとんど家から出ずにひっそりと隠遁生活を送った。収入のないアンドレは、祖母の恩給とこの旧家に庇護されて生きてきた。祖母がきたした認知症は、父の鬱病と同種のものに思えた。忌まわしい記憶の自動停止ができなければ、老化を待って徐々に忘却していくしかないのかもしれない。アンドレは父がしたように、バイクに乗ることをはじめた。なぜ、バイクなのかを知りたかった。祖母は不思議な顔でその行動を見守っていたが、反対することはなかった。

アンドレはまるで白湯のように、ぬるい酒を胃に流し込んだ。

「オヤジが死ぬ前にいじっていたバイクが、まだ今でも納屋にある

んだ。見るか？」

言うと同時に、立ち上がる。冷や酒の酔いと昼間のツーリングの疲れに、足元をふらつかせながらタカシも続いた。

暗い納屋の裸電球が、錆にまみれた一台のバイクを浮き上がらせた。オレンジ色の光の下に横たわるそれは、ホンダCB750F0URだった。すべての部品が揃い、完全な形を晒している。かつての所有者は組み上がったこのバイクで、すべてを捨て去ると同時に、大切なものを取り戻す旅に出るはずだった。

「すごいだろう。初期型だ。十年以上この状態だがな」

タカシは目を見張り、そして言葉を失った。鬱病に苦しみ、そこから抜け出そうとして、このバイクに何かを見いだそうとした父親の気持ちも思った。期待させる何かが、このバイクにはある。

「いつか、オレが蘇らせるつもりだ。まだそのときではないがな」ブルースートを戻しながら、アンドレは言った。

「レストアするならオレも手伝うよ」

「そのときには頼む」

微臭い埃に混ざって、ふわりとガソリンのおいがした。再び走り出す日待ち望んでいるバイクからのメッセージに思えた。翌日、すでに高くなつた太陽の光に炙られて、二人はほぼ同時に目を覚ました。一升瓶を空にしたままでは記憶にあるが、その後、泥に呑み込まれて眠った。奈良漬けのような二人を迎えたのは、ひどい悪臭だった。奥の部屋からくる耐え難い臭いの塊が、鼻を潰そうとする。

宿あのような頭痛に苛まれながら襖を開けた。タカシを迎えたのは、田村賀代先生の幽鬼のような姿だった。ざんばら髪を掻きむしり、落ち窪んだ目だけは煌々と暗い光をたたえている。手に握りしめていた何かを、突然タカシに向かって投げつけてきた。人糞だった。布団や壁に悪臭の原因が、塗りたくられてある。

「ばあちゃん、オレだよ。すっかりしてくれ」

アンドレが震える声で、老婆の肩に触れた。

「生徒に殺される」

と叫んで、その手を振り払う。タカシは凍りついた。その言葉はタカシに向けられたものに思えた。最後の演奏会で、心ない悪戯によって先生の尻をひどく傷つけたことを恨んでいるのだ。

「生徒なんてどこにもいやしないよ。誰もいない」

自分の息子が自殺した翌年、田村先生は定年退職を迎える直前に、金管バンド部員に特訓を課して、演奏会の入賞を勝ち取った。それは、はかりしれない悲しみや絶望が取らせた行動に違いなかった。あるいは、謹厳実直な音楽教師として半生を生きた自分の一生を完遂させるために、必要な行為だったのかもしれない。それを田村先

生本人に聞いてみることは、もう出来ない。人生の時をわずかに残し、変わり果てた姿の田村先生がそこにいた。タカシは、深く頭を下げて、謝罪の言葉を口にした。

「気にするな。ちょいちょい頭のおかしい教え子から、嫌がらせの電話があったりするのが原因だ。おまえのせいじゃない。生真面目に教師をやりすぎた結果がこれだ」

やりきれないというふうに、アンドレは首を振り、軽々と田村先生を抱き上げた。おとなしい猫のように暴れることはなかった。

「風呂に入れるから手伝ってくれ」

部屋中を拭き上げ、薪を割って風呂をおこした。三人は順番に、半分風呂場の屋根が崩れて空の見える五右衛門風呂で入浴した。

屋根の上に覆い被さる樹齢百年のクスノキが、わさわさと初夏の風に吹かれて枝を鳴らした。少年のアンドレの背中をすっぽりと包んだ胴体のうろが、今でも誰かの来訪を待ち受けているかのようにだった。

ライダーの聖地「南阿波サンライン」は、遙か太平洋を眼下に望む空中回廊だった。二車線のやや荒れ気味の ASFアルト道路が、崖を切り取って十数キロも続く。ガードレールの向こうは遙か千尋の谷となつて、真つ逆さまに海へと落ちる。

レースさながらのスピードで、車体をフルバンクさせたバイクが飛んでいく。アンドレの GSXR1000 に引き離されまいと、Z2とCBFが渾身のステップを踏みながら追い縋る。気の狂ったミツバチが群れ飛ぶような光景だった。背中に生えた羽で、地面すれすれを滑走していく。崖上の木の枝から野生の猿がぶら下がって笑っている。平和を切り裂く排気音にもかまわず、悠々と猿の親子が自由を満喫していた。

第一展望台に滑り込み、ヘルメットを脱いで一息ついた。アンドレの GSXR はヤマダによって、ネイキッド仕様に改造されていた。落雷で焼けたカウルを剥ぎ取り、廃車のライトを流用し、自作のステータでうまく取り付けてある。精悍なストリートファイターに仕上がったバイクをアンドレに渡しながら、「修理代は缶ビールをひとケースな」とヤマダは無精髭を搔いた。

GSXRの隣には、アカネのニンジャ250Rが羽を休めている。昨年、杉田アカネが山田輪業を訪れたのは、アンドレの紹介によってだった。認知症の進んだ田村賀代先生は、その後、町の介護保険施設に入所することになった。アンドレは山間の旧家から、バイクに荷物を積んで施設に通った。

アカネはその施設の介護職員だった。アンドレのバイクを見て、なぜか興味を持ち、免許を取って自分も乗り始めた。山田輪業でく

すぶっていた面々が、かいがいしく世話を焼いたのはいうまでもない。

なかでもサトウのがんばりは痛ましいほどだった。ニンジャ25ORが納車になった日、鼻の下をでろりと伸ばして、新車の取り扱いを説明する。絹のように白い肌が危険なほど露出したタンクトップ姿に、視線をだらしなく泳がせていた。アカネの胸は真っ直ぐ前に突き出している。はち切れそうなポリウレームの乳房は、みごとに深い谷間をつくって引き締まっていた。颯爽とアカネは赤い革ジャンを羽織り、そろいの革グローブをはめた。

サトウとたまたま店に居合わせたタカシ、歯科医のコンドウで、ニンジャの慣らしも兼ねたミニツーリングに出かけることになった。ハナからそのつもりで準備していたサトウは、おまえらも行くのかよという露骨にイヤな顔をした。

うららかに晴れた初秋の祭日だった。アカネのリングのような赤い頬が、うれしそうにゆるんでいる。初心者には見えない思い切りの良さで、澆刺と店先を飛び出していく。あわててサトウのトライアンフが追いかける。オレンジ色のスクランブラーは、執拗にねばってヤマダから借り出したものだ。クロームの輝きが新車同様の、サトウの給料では一生かかっても手に入れない代物だった。

山田輪業でのサトウの給料は「メシ」と「家賃」だった。昨年の秋まで一流電機メーカーの派遣社員として、リチウム電池をつくるラインで働いていたが、世界中を覆う金融危機とやらで雇い止めにあつた。いわゆる派遣切りというやつだ。出身は千葉かどこからしいが、帰る家はなさそうだった。山田輪業に無理矢理転がり込んで、バイク屋の真似ごとをしている。

サトウはタカシの通う大学の先輩で、見るたびに自らの行く末を悲観させられる鏡だった。しかし、二人ともいまだせっぱ詰まった焦りはない。脳天気さでは自分の方が上かもしれないと、タカシは自己嫌悪を感じている。

一行のツーリングは、紅葉にはまだ早いが、夏のムツとする湿度と熱気からやっと抜け出した山へと向かった。涼やかな県道をゆつくりと、景色を見ながら進む。パノラマ映画の中を走る錯覚におちいった。どこまでも穏やかな光景が続く。しかし、一行が満喫していた東の間の平和は、とんだハプニングの前触れであつた。

先頭に行くアカネを守護する意志を漲らせ、サトウはその尻に縫っている。ローライズのジーンズと革ジャンの隙間に露出するアカネの腰から、目が離せなくなっているにちがいない。一羽のガラスが、その不埒な行為を糾弾した。

山の麓の町を抜け出ようとしたときだった。路傍のゴミ置き場で、つがいのガラスが餌を漁っていた。そのうちの一羽が突然、何かに



驚き、道路に向かつて飛び立った。避けようのない勢いで発射されたカラスの銃弾だった。

サトウが直撃を受けた。側方から左胸あたりに被弾した彼は、まったくコントロールを失ってバイクもろとも道路に転がった。派手な音とともに、金属が地面を擦る火花が散った。大の字にのびたサトウは、ぴくりとも動かなかった。駆け寄るタカシたちも、すぐに事態が深刻であることに気付いた。頭を揺らさないようにようやくヘルメットを脱がせた。青白い顔はまったく息をしていない。

歯科医のコンドウが脈をとり、上着を脱がせるようタカシに命じた。仰向けにさせて後頭部を持ち上げ、大きく人工呼吸を二度、胸骨の下の心臓を掌で押す救急蘇生をはじめめる。

「はい、あなた、やっててください」

コンドウの言葉に、すぐさま反応したのはアカネで、体を入れ替えマッサージを交代した。介護施設で働くアカネは、訓練の経験があるのだろう。ためらいのない動作で、人工呼吸と心臓圧迫を繰り返している。タカシは携帯電話で救急車を呼ぶ役目を引き受けた。

コンドウが、BMW R1150 RTのパニアケースから何かを取りだして、駆け戻ってきた。小さなショルダーバッグほどのAED（自動体外式除細動器）だった。手際よく取り出し、付属のパットをサトウの肉付きのいい胸に張りつける。

「離れてください」

音声アナウンスに従って、機械を操作する。作動を示すランプが点滅した。コンドウがスイッチを押すと、サトウの体全体がびくんと脈打った。

「あれ、ここはどこ？」

むくりとサトウが起きあがった。見守っていた全員がのけぞった。「ゆっくり、まだ寝てるんだ」

コンドウが促すと、うっとりした顔でサトウは、再び道路に横たわった。

「夢みてたのか？ だったら醒めないでほしかった」

後になって聞いたところによると、アカネから熱烈な接吻を受け続ける夢を見ていたのだという。アカネが人工呼吸をしたことは誰も話さなかった。救急車が来て、意識を取り戻したサトウは、笑いながら自ら寝台に乗った。手を振りながら運ばれていくサトウの頭上から、電線に並んでとまったカラスの夫婦が、間抜けな声でアホウと啼いた。

コンドウはサトウに付き添い、救急車に乗っていった。ヤマダに連絡を取り、バイクを引き取りに来てくれるよう頼んだ。トラックを待つ間、壊れたバイクを片付けた。横倒しになったバイクは死んだ仔牛のように重かった。汗だくになって一仕事終え、冷たい缶コ

「ヒールを飲んだ。」  
「コンドウ先生のおかげで助かったね。サトウくん、死ななくてすんだ。」  
「まったく、人生何があるかわからない。カラスの直撃なんてね。」  
「ほんとに人の命ってはないものよね。幸運にあずかれないひとの方が、圧倒的に多いもの。」  
アカネの言葉の裏にある幾多の経験を、具体的に聞くことはできなかった。  
「しかし、AEDをバイクで持ち歩いてるなんて。」  
「それには理由があるんだ。」  
アカネは静かに、コンドウにまつわる話をはじめた。ヤマダから聞き出したという。アカネの話しぶりは、なぜか妙な熱を帯びていた。

コンドウは小学生のひとり息子を、少年野球の練習中に不慮の心臓麻痺で亡くした。センターフライを捕球しようとしてグラブを差し出した姿勢のまま、前方にばたりと倒れて動かなかった。皆、何が起ったのかわからなかった。救急蘇生の心得のある者がそばにいなかった。救急車を呼んだが、重ねて不運なことに、渋滞で遅れて間に合わなかった。コンドウは歯科医院で診療中だった。

妻と子供と三人家族だった。突然の悲劇がもたらした絶望は、立ち直りのきつかけもみつからないまま凝固した。歯科医院に休診の札をかけ、コンドウは遍路となって、妻と四国八十八カ所巡りをしてみた。しかしそれも、悲しみが増すだけのような気がして、最後まで続けられなかった。子供に先立たれた夫婦二人で、どのように生きていったらいいのかわからなかった。暗いトンネルの中を手探りで進むような年月は、しっかりと夫婦が結んでいた手を、いつのまにかほどき、歩みをはぐれさせた。

コンドウの妻は、その頃急速に信者を増やしつつあった「真実教」という新興宗教に傾倒しはじめた。真実教は一律五百円の護摩焚き供養をうたい、手軽に誰でもできる信仰として、心の隙間に侵入した。妻はやがて世話役にまわり、教団での地位を高めていった。落ち込む妻の救いになるのならと、コンドウは傍観していたが、加熱の度合いにただならぬものを感じたときには、すでに手遅れだった。妻が家を出たのは、三年前の正月だった。驚くべきことにすべての預金通帳が解約され、あるだけの現金が持ち出されていた。後を追う気にもなれなかった。妻はコンドウより宗教を選び、コンドウは妻と一緒に信仰の奈落に沈んでいくことを拒んだ。

歯科医院を再開し、仕事に没頭する一方で、コンドウは社会奉仕活動をはじめた。何の兆候もなく、スポーツ中に突然死する青少年の増加が問題視されはじめた頃だった。県庁に働きかけ、街中のス

ポーツ施設にAEDを設置するよう、有志とともに運動した。

行政が動き、実際にAED設置の看板が、町のあらゆる場所で見られるようになった。これさえあれば息子は命を落とさずにすんだのと思うと、ときどき街角で目頭を押さえることになったが、コンドウはこの活動を通して自分の人生を取り戻した。息子の死を寿命だと思えるようになったのだ。

自分はひとりで生きていかなくはならないと思った。コンドウはなぜか、学生時代からすっかり忘れていたバイクに再び乗り始めた。BMW R1150 RTという大型のバイクを選び、その大容量のパンアケースには、いつもAEDを積んで持ち歩いていた。

息子の死から十年の月日が流れていた。五十歳を迎える彼は、バイクでどこにでも出かけた。診療があるため、そう長い休みを取ることはかなわなかったが、時間があるときはいつもバイクに乗った。そのうち、もうすこし歳をとったら仕事をおしまいにして、日本一周の旅に出かけようと思っている。

潤んだ眼を輝かせながら、アカネはコンドウの話を続けた。黒い瞳の奥底にはあきらかに好意の炎が燃えさかり、彼女がコンドウに寄せる想いを訴えてくる。ひとの恋心に親子ほどの年の差が、決定的な障害となるはずもなかった。いつから何がきっかけでそうなったのか、詮索する気もなかったが、タカシはかすかにコンドウへの嫉妬とサトウへの同情を感じた。

やがてヤマダのトラックが到着した。壊れたトライアンフとコンドウのBMWを乗せて、病院へと向かう。トラックの運転席から、彼は叫んだ。

「おまえらは、先に帰れ。無事帰り着いたら、今日の幸運をバイク乗りの神様に感謝しろ。そしてとっとと寝ろ」

ときどき、ヤマダはこのバイク乗りの神様という言葉をお口にしている。いささかの信仰心もあるはずのないこの男が意味するところは、なぜかすくとタカシの胸に落ちた。人間は誰しも、自分の力の及ばない大きなものに生かされ、監視されている。そいつはいつも足元で口をポツカリと開けて、不運を踏み抜いて落ちてくる者を待ち受けている。いつまで生きるのか、それはバイク乗りの神様に聞け、というヤマダの言葉を、タカシはすんなりと受け入れた。

その後、サトウは何事もなく復活を遂げ、あいかわらず鈍感にもアカネをねらってつきまとい続けている。コンドウがアカネの気持ちに気付いているかどうかは、タカシにはわからない。

展望台から、遙か彼方の水平線に浮かぶ貨物船の航跡を眺めた。無限の空間と時間が、タカシたちの目の前に広がっている。大海原

のむこうから、毎年アカウミガメたちは産卵のために、オールのよ  
うな前足を漕いで、懸命に泳いでくるのだ。

「今日は、バイクがオレを嫌っているよ」

海を眺めながら、リヨウちゃんが熱っぽい顔をさらに赤らめてつぶ  
やいた。彼のドゥカティは、駐車場の片隅で艶っぽい悪女のように  
そっぽを向いている。

「乗れてないよね、リヨウちゃん。後ろから見るとなんだかふらふ  
らしてるもん」

サトウが気の毒そうに言う。

「スランプってやつか？ 気にするなってことよ」

ヤマダが煙草をふかす。リヨウちゃんの家業の仏壇屋が倒産の危機  
に瀕していることを知っている。皆でなんとか励みたいが、どう  
にもできないもどかしさをかかえて黙っている。

「さて、わたしはもうひとつ走り」

アカネが革ジャケットを引っかけて、ニンジャに跨った。走るのが  
楽しくて仕方ない様子だ。コーナーを抜けるいでたちも、どんだん  
さまになってきた。

「そうだね、練習あるのみだよ」

サトウも慌ててヘルメットを被る。どこまでもアカネをつけ回すつ  
もりだ。スカイラインを往復するために出て行く二台に、珍しくリ  
ヨウちゃんも続こうとしている。

「リヨウちゃん、今日はもうやめときなよ」

ヤマダの言葉に、なぜかリヨウちゃんが急に切れた。彼が怒ったり  
声を荒げたりするのをはじめて見た。

「うっせえ。オレだって速いんだぞ。ドゥカティ、最速よ」

乱暴にサイドスタンドを跳ね上げ、バイクを発進させた。岩が転が  
るような勢いでかつとんで行く。

「まずい。なにかやらかすつもりだ」

アンドレがこめかみを押さえながら言った。

「イヤなイメージが浮かんだ。たぶん、リヨウさんの意識の尻尾だ  
と思う」

他人の心の端っこが見えたのだという。アンドレの特殊能力が発揮  
されるのを、はじめて眼にした。

「ほんとだ。これを見なよ」

ヤマダが、リヨウちゃんの残していった飲みかけのペットボトルを  
取り上げて、においを嗅いだ。

「うへっ、こりゃあ強烈だわ」

ミネラルウォーターだとばかり思った液体は、強い酒だった。

「火がつきそうな焼酎だ。泡盛かなんかだな」

アルコール臭い中身を地面に捨てながら、ヤマダは眉間に皺を寄せ

た。リヨウちゃんが赤い顔をしていた理由が、やっとわかった。

「たぶん死ぬつもりだと思う」

アンドレが宙を透かしながら言う。

「なんだって、こうしちやいられない」

煙草を投げ捨て、タカシは叫んだ。

「バカヤローが。死なせてたまるもんか」

ヤマダは焦ってZ2に飛び乗った。全員バイクに駆け寄り、急発進した。事態の飲み込めないコンドウが、最後についてきた。

鬼神の走りを見せて、Z2はコーナーを折りたたんでいった。やがて、アカネとサトウに追いついた。リヨウちゃんは彼らを追い越していったらしい。信じられないハイペースだった。こんなに速くリヨウちゃんが走るのははじめてだった。何かが、彼に取り憑いたとしか思えなかった。

三台はアカネたちを次々に抜き去り、さらにペースを上げた。ヘルメットの中で、サトウが驚いた目を向けた。めいっばいの走りで、リヨウちゃんを追った。

いくつか先のコーナーに、ドゥカティMHR900のテールランプが見えた。次の瞬間、その赤いバイクはみごとに空を飛んだ。五十センチほどのガードレールの隙間から、どこも接触せずに遙か千尋の谷に勢いよくダイブした。思考を一瞬停止させて、その背中を見送った。路側にバイクを止め、おそろおそろ足元を見下ろした。眼下には白い波頭が砕け散るだけだった。

「飛んだ」

皆の心臓が早鐘を打ち鳴らす。夢であることを祈ったが、海面から吹き上げる潮風は、やがて溜息をたぐり寄せた。

「ずっと先から下りる道を知ってる」

アンドレに付き従い、絶壁の麓に下りる獣道を探った。崖の斜面を木の根やつるを頼りに、這い下りた。リヨウちゃんが飛び出したガードレールの真下に、ようやく辿り着いた。

「おーい」

バイクを呑み込んだ痕跡が、黒い海面に油の波紋として丸く広がっている。それに向かって、ヤマダが大声を出した。

「おーい。死ぬな」

鼻水まみれの顔で、タカシも続けた。岩肌に張り付いて、三人は絶叫した。リヨウちゃんの顔や、短い足でよちよちとドゥカティに乗る姿が脳裏に浮かんだ。海水を被ったように、眼の中がしょっぱい水で溢れた。

「カレッタ、カレッタ」

呪文のような声が、どこかから聞こえた。それは深い海の底から聞こえてきたかに思えた。

「なんだ？すぐそこにいるぞ」

ヤマダが指差した先に、膝を抱いて小さく蹲ったりリョウちゃんを見つけた。

「カレッタ、カレッタ」

ずぶぬれの姿で眼鏡をなくした顔を上げ、リョウちゃんがまた眩いた。

「なんだい、そりや？」

「*careta careta* はアカウミガメの学術名だよ」

アンドレに言われて、博物館で見たウミガメのことを思い出した。よく太ったずぶ濡れの体を、三人でかかえ上げながら、崖をよじ登った。心配そうな顔で待つ仲間のもとに戻ると、パトカーと救急車がようやくくけたたましいサイレンの音とともに到着した。リョウちゃんが無事なことを示し、海に呑み込まれたバイクは跡形もないことを説明して頭を下げ、引き返してもらった。

AEDを手にしていたコンドウは、それをパニアケースにしまい、かわりにバスタオルを取りだしてリョウちゃんに手渡した。頭からタオルを被った彼は、急に我に返ったように肩を震わせ泣き始めた。

「ああ、怖かった」

嗚咽の合間でリョウちゃんは言った。

「昨日出した不渡りで、うちの会社も終わりだ。もう好きなバイクにも乗れなくなるかと思うと、死んだ方がましかなんて思っちゃったよ。みんながいるときにごめん」

取り囲んだ仲間の目も濡れている。

「海に落ちて、沈んでいくバイクを見ながら、オレもこれで死ぬだと思った。体の力を抜いて眼を閉じたら、起立したままの姿勢でずるずると降下していった」

深い諦めは死への恐怖を凌駕した、と彼は言った。

「奇跡が起こったんだよ」

はじめて顔を上げて、皆の顔を見た。

「両足が何かに触れたんだ。明らかにそれは亀の甲羅だった。大きなアカウミガメの背中に立って、沈むのをやめた」

信じられるか？と彼は力の蘇りはじめた目で仲間を見回した。

「ウミガメの背中に乗っていたんだ。たまたまそこにカメがいたとしか思えない。水中から上を見ると、太陽の光が眩しく差し込んで、オーロラのようにきれいだった。」

頭がおかしくなったとは、聞いている誰も思わなかった。

「まだがんばれるという気持ちがあがって、湧き起こって、明るい水面を目指して泳いだ。なんとか這い上がったら、君たちが助けに来てくれた」

すまなかった、と彼は再び謝罪した。

「そんな、会社が潰れたくらいで、オレなんかいつ飢死にしたっておかしくない生活ですよ」  
サトウが泣き声で言う。

「海岸をきれいにしてやった恩返しかなあ？ウミガメに助けられた。あれはたしかにカメの背中だった」

浦島太郎みたくだと笑う。いつもの穏やかなリョウちゃんに戻っていた。

「愛車が海底に沈んでしまった。ほんとうに気に入ってたのに」

「バイクはまた買えばいい、ウチも儲かるしな」

ヤマダが、げははと下品な笑い声をたてた。

夏の太陽はまだいっこうに衰える気配も見せず、頭上に輝いている。紺碧の大海原を平坦な一枚の鏡にして、あらゆる生命の滋養となる光を降り注ぎ乱反射させる。悠久の時の歩みの前では、個々の人間の悩みなど、太古から生きながらえてきたウミガメの憂鬱にも及ばない。前脚のひれで力強く水を掻き、深い海の底を目的の地を目指してひとり進む。気の遠くなりそうな航海にひるむこともない。つらいからと、迷ったり途中で投げ出したりすることもない。ひたすら逞しく、自らの使命を全うしようと生きるだけだ。ただたんにそれしかできないから。愚直に生き抜くウミガメの姿は、想像しただけで微笑ましい。

青いCB750Fのタンクに映る白い夏の雲を、タカシは指でなぞった。自分の人生はまだとば口に立ったところだ。こいつとともに、自分はこれからさまざまに楽しみを見つけていける。そう思うと、ぞくぞくするほど幸せな気分が訪れるのだった。

へ了へ